資料２－２

水源環境保全・再生かながわ県民会議　活動結果報告

平成22年９月４日に開催した「第10回水源環境保全・再生かながわ県民フォーラム（山梨県フォーラム）」の内容は次のとおりでした。

名　　称	第10回水源環境保全・再生かながわ県民フォーラム（山梨県フォーラム）
	企画運営委員　井上伸康　倉橋満知子　高橋幸一
開催日時	平成22年９月４日（土）　13:30～16:00
開催場所	大月市民会館　３階講堂
出 席 者	井伊秀博、井上伸康、加山俊夫（代理出席）、北村多津一、木下奈穂、久保重明、倉橋満知子（※１）、木平勇吉（※２）、小林信雄、髙橋二三代、増田清美、柳川三郎 ※１　主催者あいさつ　※２　コーディネーター
参 加 者	１４２名
報 告 者	倉橋満知子
内　　容	**１．主催者あいさつ　倉橋委員** ○神奈川県では水源環境保全税を財源として、水源の森林づくり事業など12の特別対策事業を行っている。第２期実行５か年計画の策定にあたり、相模川の上流域対策についてもその位置づけが考えられている。 ○相模川は神奈川県民の６割の水がめであり、相模川の８割の水が山梨県の桂川・道志川から供給されている。神奈川県民900万人の約半数の飲み水が、山梨県桂川流域に住む20万人の方に支えられていることになり、上下流の連携が必要と考える。 倉橋委員 **２．山梨県の森林や生活排水への取組について** 山梨県 森林環境総務課 刑部課長補佐 が説明を行った。 **３．神奈川県の水源環境保全・再生施策と両県共同調査について** 神奈川県 河原水源環境保全課長 が説明を行った。 **４．相模湖・津久井湖の現状報告について** 神奈川県 流域海岸企画課 藤崎ｸﾞﾙｰﾌﾟﾘｰﾀﾞｰ が水質改善に係る取組について報告を行った。 **５．山梨県事業関係者の活動報告について** 山梨県 北都留森林組合 中田参事 が事業者の視点から見た山梨県の森林の状況などについて報告を行った。 ○国産材が利用されず、日本の木材自給率は２割に減少し、林業経営は厳しい状況にある。林業就業者は減少し、過疎化・少子高齢化の問題、野生動物の食害問題などが発生している。 ○甲斐東部材木材３協同組合（原木市場・製材工場・プレカット工場）は桂川・相模川流域唯一の木材生産拠点施設であり、ここを活用した取組を進めたい。 北都留森林組合中田参事 ○森を中心とした持続可能な流域循環型社会の実現に向けて、上下流の連携が必要であり、行政・市民・事業者のネットワークが重要となる。 **６．パネルディスカッション「県民参加による県境を越えた流域環境保全」** **コーディネーター　東京農工大学名誉教授　木　平　勇　吉** **パ ネ リ ス ト　桂川・相模川流域協議会代表幹事　河　西　悦　子** **〃　多摩川源流研究所所長　中　村　文　明** **〃　神奈川県環境科学センター専門研究員　田　所　正　晴** 各パネリストからの活動報告に引き続き、会場からの質問・意見等を踏まえ、パネルディスカッションを行った。

内　　容 （続き）	**パネルディスカッションの趣旨について** **（木平委員）** ○神奈川県が行っている水源環境保全・再生への取組の大きな特徴の１つが県民参加・住民参加である。 ○上流に住んでいる人の責任や義務、あるいは下流に住んでいる人の責任や義務などについて山梨県の方々と意見交換を行いたい。 **コーディネーター** **（木平委員）** **活動事例・意見発表** **（河西氏）** ○アオコ対策、生活排水対策、上流域の水源林整備など、流域の課題に取り組んでいく際に、県境の壁が課題となっている。流域協議会が提案する「流域材」についても然りである。 ○環境問題は経済問題であり、お金の流れが環境を決定していく。県境の壁、自治体の壁を越えて協同し、情報を共有化して市民に分かる形でオープンにしていくことが重要である。 **（中村氏）** ○多摩川の源流・相模川の源流が山梨県にあるということがまだ知られていない現状がある。 ○豊かな森は流域共有の財産であり、流域の市民で一緒に守っていく必要がある。その仕組みづくりの一環として、平成 15 年度から「緑のボランティア」という森林再生ボランティアによる間伐作業を行っている。 ○森林整備作業にあたって一番つらいことは森を管理するための道が無いことである。そこで、林道より安価な「森林作業道」の整備を促進していきたい。 **（田所氏）** ○相模湖・津久井湖では窒素・リン濃度が高濃度であり、流入不可量の実態を調査したところ、源流域付近で高い値を示した。 ○発電用水は源流域で取水され、発電所で使用された後に放流されるまで、ほとんど導水路を通っているため、自然浄化作用を受けることが無く、そのまま相模湖へ流入している。 ○下水処理場で脱窒・脱リンした場合、相模湖への流入負荷量は、窒素が 3.7%減、リンが 5.4%減となると見込まれる。 **パネリスト（左から河西氏、中村氏、田所氏）** **パネルディスカッション** 【水源環境保全・再生への主張】 **（河西氏）** ○地域住民が主体的に関わる仕組みを作る必要がある。また、学校における流域材の活用や、上流域の魅力的なスポット整備など、市民の人たちに見える施策展開が必要である。そして、神奈川県議会議員や県民会議委員の方に県外上流域の現場を見に来てもらいたい。 **（中村氏）** ○県境を越えて、流域全体を良くするという共通認識を持つことが重要である。神奈川県と山梨県で流域共通の基金を設置するなど、全国のモデルとなる新しい政策を作ってもらいたい。 **（田所氏）** ○調査の結果より、水源域のところですぐに濃度が高くなっているため、その汚濁負荷要因を把握する必要がある。また、これまでは外部からの負荷ばかりが議論されてきたが、今後は湖の内部からの負荷（堆砂に含まれる有機物など）についても考えていかなければならない。

第 10 回県民フォーラム企画運営委員の感想

井上伸康	山梨県内での森林整備や生活排水への取組み状況、さらに流域協議会等の活動「想い」を直接聞くことができ有意義でした。 また、桂川が神奈川県民の飲み水で、下流の相模湖等では、上流からの流入水により「アオコ」が発生し飲み水に影響を及ぼしていることから、その対策を講じていることを知ってもらうよい機会でもあった。
倉橋満知子	山梨会場ということで、参加者周知に不安がありましたが、関係者の協力で予想以上の参加をいただき、第一回目の県外上流フォーラムを無事終えることができました。山梨の市民意見を充分聞く時間がなかったのが残念でしたが、パネラーからの山梨の現状が伝わったように感じます。

資料２－２

水源環境保全・再生かながわ県民会議　活動結果報告

平成 22 年 10 月 24 日に開催した「第 11 回水源環境保全・再生かながわ県民フォーラム（川崎・横浜地域フォーラム）」の内容は次のとおりでした。

名　　称	第 11 回水源環境保全・再生かながわ県民フォーラム（川崎・横浜地域フォーラム）
	企画運営委員　井伊秀博　北村多津一　木下奈穂　久保重明
開催日時	平成 22 年 10 月 24 日（日）　第１部 13:30～15:30　第２部 15:35～16:20
開催場所	川崎市総合自治会館　ホール
出 席 者	天野望（※１）、井伊秀博、岩渕聖、加山俊夫（代理出席）、北村多津一、木下奈穂、久保重明、小林信雄、齋藤光弘、髙橋二三代、田中充（※２）、増田清美、柳川三郎 ※１　主催者あいさつ　※２　コーディネーター
参 加 者	１０２名
報 告 者	井伊秀博
内　　容	【 第　１　部 】 **１．主催者あいさつ　天野委員** ○神奈川県の水資源開発は、昭和 13 年の相模ダム建設開始から、平成 12 年 12 月の宮ヶ瀬ダム竣工まで、約 60 年間に４つのダムを完成させた。これは全国で最も成功した事例といえる。 ○20 世紀はダム建設による水量開発の時代であったが、21 世紀に入り水質保全や水源林保全対策の時代に舵を切った。 ○ダム湖の水や水源林は県民 900 万人の命を守るかけがえのない財産であり、この県民共有の財産を保全するため、水源環境保全税が創設された。 天野委員 ○川崎市・横浜市の市民約 500 万人が県内最大の水需要者であり、最大の納税者である。今後も水源環境保全・再生事業を推進するため、ご理解・ご協力をいただくことが極めて重要である。 **２．県の水源環境保全・再生施策について** 河原水源環境保全課長が説明を行った。 **３．パネルディスカッション** **コーディネーター　法政大学社会学部・同大学院政策科学研究科教授　田　中　　充** **パ ネ リ ス ト　コカ･コーラ セントラル ジャパン株式会社** **常務執行役員 広報・ＣＳＲ推進部長　島　田　勝　一** **〃　かながわ森林インストラクターの会理事長　島　岡　　功** **〃　日本ミクニヤ株式会社東京支店環境防災部課長　原　田　智　也** 各パネリストからの活動報告に引き続き、会場からの質問・意見等を踏まえ、パネルディスカッションを行った。 **水源環境保全・再生の仕組みと課題 及び パネルディスカッションの趣旨について（田中委員）** コーディネーター （田中委員） ○森林・河川・地下水という自然が持つ水の循環機能を保全・再生することにより、良質な水が安定的に確保され、受益を県民にフィードバックすることができる。 ○水源環境保全の意義は、県民の水源と森を守ることにある。また、21 世紀のグローバルな課題として、地球温暖化の進行と水資源の不足が挙げられる。 ○県民会議は水源環境保全活動の中心に位置し、計画の策定、事業の実施、モニタリング調査の実施、評価・見直しの各段階に県民意見を反映させる役割を果たしている。 ○「私たちの水はどこから来ているのか」というテーマのもと、水源環境保全・再生施策の理解と、水源環境に関する課題の共有が今回のフォーラムのねらいである。

内　　容 （続き）	**活動事例・意見発表** **（島田氏）** ○企業の社会的責任として「環境」に対する取組は不可欠である。 ○清涼飲料水メーカーにとって一番大切な原材料は水である。水の使用量削減をはじめ、企業活動で与える環境負荷を軽減させる取組を行っている。 ○我々の水はどこから来ているかを正しく認識し、保全と改善のために何ができるのかを考え、地域の皆さんと取り組んでいる。また、自然体験学習『「森に学ぼう」プロジェクト』では、宮ヶ瀬湖において次世代を担う子どもたちに水源地域の大切さを学んでもらうと共に、下草刈りなどを体験してもらっている。 **（島岡氏）** ○森林インストラクターの役割には、①森林保全作業指導（植栽、下刈、枝打ち、間伐）、②森林探訪案内（自然観察）③普及啓発活動（環境学習、街頭キャンペーン）などがある。 ○かながわ森林インストラクターの会は、水源の森林エリアにある「やどりき水源林」「21 世紀の森」を主な活動拠点として、県民参加の森林づくり、学校の環境学習、やどりき水源林の集い、水源林パートナーの支援などを行っている。 ○川崎市では全域に特別緑地保全地区が指定されており、保全団体が活動している。保全団体のひとつである小沢城址里山の会では川崎市緑の基本計画に基づき、植樹活動、竹林整理、環境教育支援、史跡案内などを行っている。 **（原田氏）** ○環境や防災に関わる調査・コンサルティング会社として、森林に関する調査などを行っている。 ○地表面に植物がなく表面が侵食された森林、土砂の流出が著しい渓流など、森林や渓流が荒廃している状況である。これら荒廃した森林や渓流に対して、面（森林整備）と点（えん堤等）の対策が必要である。森林を良好な状態に導く計画の作成や対策を取るための調査などを通じて、水源環境保全・再生に貢献していきたい。 **パネルディスカッション** 【水源環境保全・再生施策に期待すること】 **（島田氏）** ○企業が市民・ＮＰＯ・行政と一緒になって活動を行っていくにあたり、行政にコーディネーションをお願いしたい。 **（島岡氏）** ○森林整備は 30～50 年先でないと結果が出てこない。早急に結果が出るような事業への予算配分も検討してほしい。 ○間伐材の利用にあたり、流通システム等の整備が必要である。 ○人工林調査でＣ・Ｄランクをつけられた森林に対する事業の進捗状況について、県民にわかりやすく情報提供してほしい。 **（原田氏）** ○県では、企業・団体向けに水源林パートナー制度などの支援を行っているが、若者に参加してもらえるような取組が必要である。より多くの人に森林の現状を知ってもらい、興味を持って活動に参加してもらえるようにしていかなければならない。 **パネリスト（左から島田氏、島岡氏、原田氏）** **【 第　２　部 】** 「第２期かながわ水源環境保全・再生実行５か年計画」の骨子案の説明と意見交換を行った。

第 11 回県民フォーラム企画運営委員の感想

井伊秀博	御挨拶を引き受けて下さった天野委員、そしてコーディネーターを引き受けて下さった田中委員に感謝申し上げたいと思います。それから積極的に発言いただいた委員の方々にもお礼申し上げます。県民フォーラムは、県民会議が主催しリードするものだという基本スタンスを改めて意識させられました。
北村多津一	川崎地区での開催は初めての試みでもあり、チームの皆さんや出演者、県関係者が協力し取り組んだことはとてもよかったと思います。参加者数が予想より少なかったことは、開催場所(わかりずらかった)や地域特性(東京志向)が影響していると感じました。このようなフォーラムの開催では、やはり事前準備にある程度時間が必要なことや横のネットワークの大切さを改めて実感しました。
木下奈穂	川崎で活動をする３つの立場のパネリストの話が聞けて有意義なフォーラムだったと思います。参集者人数が前回より少なく、人集めが今後の課題と感じました。今回のチラシの配布は３週間前からでした。次回はチラシの配布開始時期をもう少し早めたいです。
久保重明	次期５か年骨子案がでた最初の県民フォーラムであり、多くの参加を期待していました。川崎での人集めは難しいという予想があり、その通りの結果でした。しかし今回、参加者が意見や質問を直接述べ、パネリストや県が答える形となり、相互の理解を深めるにはよい試みだったと思っております。

森林と人をつなぐかながわ森林インストラクターの会　平成２２年　１１月　１日発行　通巻第１７６号

森のなかま

２０１０年　１１月号
ＮＯ．３１（継続１７６）

ＮＰＯ法人かながわ森林インストラクターの会　http://www.forest-kanagawa.jp　発行人　島岡　功
〒243－0014　厚木市旭町１丁目８－１４・グリーン会館　ＴＥＬ046－280－4101・ＦＡＸ046－280－4102

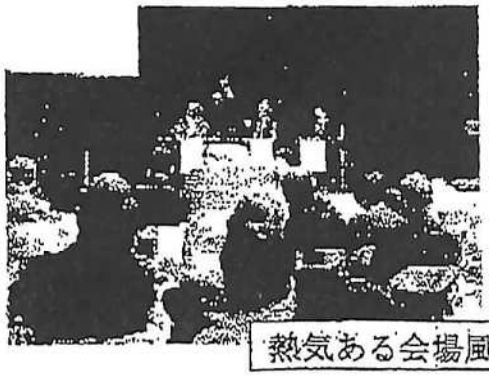
第11回水源環境保全＊再生かながわ県民フォーラム開催報告

副理事長　久保重明

第11回県民フォーラムが10月24日川崎総合自治会館ホールで開催されました。川崎・横浜地域フォーラムの担当者は、私を含め４名で６期の北村さんもメンバーの１人です。今年１月26日に第７回県民フォーラムが横浜で開催され、その折には武川理事にパネリストとして登壇されたことは記憶に新しいと思います。今回は川崎で開催、遠く酒匂川や相模川から運ばれてくる水を多く利用している川崎市、その水を再認識していただく上でもテーマは「私たちの水はどこからきているか」ということで、企画の速い段階で決まりました。パネルディスカッションの要のコーディネターにはお忙しい法政大学田中　充教授に、またパネリストにはコカ・コーラセントラルジャパン㈱常務執行役員島田勝一氏に快く引き受けて頂きました。また川崎で開催するならこの人を除いては無いだろうということで、島岡理事長にお願いしました。最後のパネリストは今回のリーダーの井伊さんが苦労して探した日本ミクニヤ㈱環境防災部 課長原田智也氏にお願いしましたが、あとで11期の方だと知り驚きました。川崎市は北西方向に長く、臨海部、中央部そして北部と全く町の雰囲気も違い、どのようにしたらフォーラムの開催の情報を流せるか難問でした。取敢えず（財）川崎市公園緑地協会の８期の野牛さんに連絡を取ったところ、極めてスピーディーに公的な場所へのチラシを配布し、またチラシの送り先をお教えて頂きました。また会の事務局から繰り返し会員に参加の呼びかけ、さらに井伊リーダーがFM川崎に出演し市民に参加を呼びかけました。勿論フォーラムチーム全員がそれぞれの関係先に参加をお願いしたことは言うまでもありません。チラシができてから１ヶ月弱、やるだけのことはやったと言う気持ちで当日を迎えました。

当日の会場は川崎市総合自治会館で用水路沿いの収容人数200名くらいのホール有する建物です。開場は13時であり、その前から何人かは集っていたが、その後の出足は悪く、座席の1/3くらいを埋めるくらいで始まりを迎えました。県民会議委員で旧津久井町長の天野氏の挨拶、水源環境保全課長のこれまでの施策説明を終え、パネルディスカッションでは水源環境保全・再生での問題点について田中教授の短い講演、引続いてパネリストからの活動紹介および行政に対する要望などが出された。島田氏からは行政には市民と手を携えて活動して行く上のリーダーシップを期待したい趣旨の発言があった。島岡氏からは短期的に効果の出る施策を、また原田氏からは若い人達がボランティア活動に積極的に参加して貰いたいとの要望がありました。

引き続いて行われた第二部では「第２期かながわ水源環境保全・再生実行５か年」の骨子案について水源環境保全課の長谷川主幹が説明し、ついで水源環境保全課、森林再生課、自然環境保全センター、環境科学センター、税制企画課が壇上に上がり、会場からの質問に答えた。会場からは桂川・相模川流域協議会メンバーから上流部の対応についての質問やまた他に会場から水源税の使う範囲についてもっと広範囲に使うべきとの意見も出された。答えに必ずしも会場が納得した訳ではないが、何回かこのような説明会を実施することが大切だと思っております。われわれ県民フォーラムチームとしては、多くの県民の方々に水源税でやってきたこと、さらに第２期の５年間計画（骨子案）に対して批判も含め意見を吸い上げ、よりよい施策につなげようとしております。会員の皆様には水源環境保全・再生県民会議や県民フォーラムなどの言葉が飛び交い分かり難いことも多いと思います。今回の報告とは別に改めて、説明させて頂きます。最後になりましたが忙しい中、駆けつけて頂きました多くの会員の方々には深く感謝いたします。



熱気ある会場風景

写真・広報部（鈴木松弘）